

## 中世城郭としての笠間城－近年の調査成果から－

笠間市教育委員会教育部生涯学習課

額賀 大輔

### はじめに

笠間城跡は笠間市の北部、笠間盆地を東側から見下ろす佐白山上に立地し、独立丘陵の西端部の複雑に入り込む侵食谷により形成される尾根を巧みに利用する山城である。近世城郭として知られる笠間城であるが、その周辺には城郭遺構が残されており、岡田武志氏と三島正之氏はそれらの縄張図を作成して紹介をしている〔岡田 2006〕〔三島 2008〕。近世の城絵図ではこの部分は城郭として描かれている形跡はないことから、これらの遺構は中世城郭の名残ではないかと考えられる。中世から存在した笠間城の証拠をこの部分に求めることは可能なのではないか。

本報告では、中世城郭としての笠間城について、近年の調査成果をふまえて考えていきたい。

### ※笠間城跡保存調査事業について(平成25年度から)

- ・平成25年度：笠間城跡調査指導委員会設置
- ・平成26年度：天守曲輪石垣応急処置調査の実施
- ・平成27年度：航空測量と図化業務、天守曲輪石垣樹木伐採
- ・平成28年度：航空測量、石垣3次元測量
- ・平成29年度：航空測量図化業務、絵図撮影業務、本丸跡地中レーダー探査・確認調査
- ・平成30年度：航空測量図化業務
- ・令和元年度：航空測量図化業務、樹木剪定
- ・令和2年度：航空測量図化業務、微地形測量(正福寺跡)
- ・令和3年度：微地形測量(笠間城跡北西の遺構)
- ・令和4年度：航空測量図化業務、微地形測量(正福寺跡東側の遺構)、発掘調査(正福寺跡)

### 1. 笠間城の歴史

- ・笠間城は承久元年(1219)、塩谷朝業の子笠間時朝によって築城が開始されたとされる。
- ・南北朝期の史料に「笠間城」の記載がみられるものがあり、その存在が確認できる。しかし南北朝期から戦国時代にかけての笠間氏の動向は、不明な点も多い。天正18年(1590)、豊臣秀吉の小田原征伐まで没落せずに存続していることから、笠間城は長期間にわたって整備・拡張された。
- ・笠間氏は小田原征伐の際に、宇都宮氏の命に背いたことにより没落。以後は宇都宮氏の支配。
- ・慶長3年(1598)、蒲生秀行の宇都宮移封に伴い、蒲生郷成が笠間城主となる。郷成の時代に、天守曲輪の整備を行い、城下町の整備もこの頃に開始されたと考えられる。
- ・関ヶ原の合戦後、徳川氏譜代の松平康重が入城後、藩主が幾度と入れ替わるが、延享4年(1747)に牧野氏が封ぜられると、牧野氏の下で明治維新を迎えることになる。
- ・浅野氏の時代に、藩政が執り行われる下屋敷が整備されるも、山城部分も存続する。
- ・井上氏・牧野氏の時代に笠間城の修復がされている。修復願が幕府に提出されるとともに、修復に関わる絵図が伝来する。

### ※近世の笠間城(図1)

- ・笠間城は鎌倉時代築城の伝承をもち、近世を通じて、笠間藩の居城として使用された。現在把握されている佐白山頂側にある笠間城跡は、笠間藩時代の城跡のことを指す。

①天守曲輪 ②本丸 ③二の曲輪 ④帶曲輪 ⑤大手門 ⑥的場丸 ⑦石垣

※建造物など：江戸時代の絵図から、御殿・櫓・櫓門・城門・城壁が見られる。本丸八幡台にあった八幡台櫓は市内真浄寺に移築(県指定文化財)され、城門についても、市内の個人宅に伝わっている(市指定文化財)。

### ※中世の笠間城(図2・3)

- ・笠間城には、笠間時朝の築城伝承があるものの、その時代に山城を構えるのは不自然。拠点として平地居館が存在していたのでは→「麓城」がその候補ではないのか([高橋 2011])。江戸時代の絵図にもその名残がみられる[額賀 2022]。

⇒中世の笠間城：平地居館から出発し、南北朝期を含む室町時代に、軍事的要請から佐白山周辺に城を移しその原型がつくられたと推測する。そして戦国期にかけて整備されていったのでは。

※近世笠間城の外側に城郭遺構と思われる痕跡がみられ、「正保の城絵図」などの絵図には城郭関連施設として描かれていない→中世笠間城の痕跡ではなかろうか？

## 2. 笠間城跡北西の遺構(図4・5)

- ・現況図を確認すると、中世城館の遺構らしきものがよく残存していることがわかり、侍屋敷の配置などは図4のように推定できる。微地形測量を実施したことで、遺構がより顕著となった。
- ・現在、当該地において発掘調査を実施中。詳細については次年度以降改めて報告。

### ○微地形測量成果

【範囲】千人溜駐車場北西側、18,500 m<sup>2</sup>

【確認された遺構】有限会社三井考測の考察を参考にした

- ・**曲輪**：測量を実施した範囲のうち、平坦地や微傾斜地となっている部分が多い。曲輪の中で最大なのはD区の約3,500 m<sup>2</sup>。おそらくこの部分に侍屋敷がおかれていたと推測される。C区は628 m<sup>2</sup>であり、2番目の大きさである。
- ・**堀(堀切)**：D区先端をコの字型に囲む堀とそこから北西に伸びる尾根筋を分断するように作られた堀切が存在する。東側の土壘上の深さはそれぞれ約7mと4mの深さとなる。堀切①から延長する堀は、途中から帶曲輪状になる。
- ・**土壘**：D区先端部分にコの字にみられるものと、北西尾根にみられる堀切に付随するような土壘跡が確認できる。
- ・**井戸跡？**：円形のくぼみがそのように考えられなくはないが、確証はない。
- ・**通路**：D区の南東側から進入する通路は、「正保の城絵図」にもみられる通路であり、侍屋敷へ通じるものである。また、D区西側には、D区へ入るためと思われる登坂路の痕跡がみられる。
- ・**虎口**：登坂路の屈曲する部分の平坦地を通過して、D区に侵入できる通路がある。人1人が通行できる幅くらいであり、この部分を虎口であると推測した。D区に入ると、その延長上に折れ曲がる微段差を確認することができ、関連する施設である可能性がある。
- ・**横穴**：D区北西端山裾にある。構築年代や使用法については不明であるが、近代の防空壕や古墳の横穴のようなものとも違う。地下水が溜まっている。
- ・**中世の痕跡**：「正保城絵図」はじめとした近世絵図には遺構の存在が描かれていないことや、遺構

の残存状況をみると、これらの遺構の大半は中世由来のものと考えられる。

※一番面積の広い曲輪については、近世の侍屋敷がおかれた場所として考えられ、それより上部にある小段状の曲輪は中世由来のものであると考えられる。「正保城絵図」で「侍屋敷」と記載された部分において、明確な城郭遺構が確認されたことは、前時代の存在を明確に表している。

※ただし、今年度の調査の様子から、江戸時代の土地利用においても相応な整備を行っている可能性が出てきた。中世と近世の関係性を整理しなければならない。

### 3. 正福寺跡東側の遺構(図6・7)

- ・現況図を確認すると、中世城館の遺構らしきものがよく残存していることがわかり、侍屋敷の配置などは図6のように推定できる。微地形測量を実施したことでの遺構がより顕著となった。
- ・当該地は次年度に発掘調査を実施予定。

#### ○微地形測量

【範囲】正福寺跡東側の遺構が展開するピークを中心とした 15,700 m<sup>2</sup>

#### 【確認された遺構】

- ・曲輪：一番顕著なのはピークの平坦地であり約 4,200 m<sup>2</sup>。内部には区画と考えられるくぼみが見られる。それ以外に虎口、土壘、櫓台などもみられる。曲輪状の平坦地は、測量地内の 7 割。29か所が該当する。
- ・虎口：ピークの曲輪 3 か所にみられる。特に北西に見られる虎口はほかに比べてしっかりとされている印象がある。
- ・土壘：ピークの曲輪や堀に付随するような形で存在する。特に曲輪の西側と南側には、櫓台と思われるような部分が見られる。
- ・堀：測量地内の 3 か所に見られる。東側の堀と鍵型の堀は、連続する地形を分断するように配置されている。北西の虎口付近にあるくぼみも堀と考えられるか。
- ・通路：ピークの曲輪に入るものと、小曲輪群の間を移動するための通路が確認されている。
- ・窯跡？：3 か所で確認された。形状から窯跡の可能性がある。
- ・ピット状の窪地：柵列や建物跡の名残か？

※絵図上で近世侍屋敷地として記載されている部分は、今回の測量箇所のすぐ西側の平坦地がそれにあたると考えられる。「正保城絵図」では、この部分は山林として描かれていることから、中世以前の土地利用の痕跡が残されていると考えたほうが自然である。

### 4. 正福寺跡

- ・現況図を確認すると、遺構の残存状況を把握でき、微地形測量を実施したことにより詳細な状況を確認することができた。
- ・令和4年度には発掘調査実施して、当該地の状況を確認した。発掘調査成果については、別の機会で報告を行う。
- ・微地形測量成果として、本堂跡、塔跡、曲輪、堀、土壘、井戸跡？、塚？、通路、出入口？、中世の痕跡(本堂整備時に削平されなかった部分)が確認できた。

※土木工事量も多く、幾重にも帶曲輪がめぐらされていること等を併せて考えると、単純に寺院を整備するだけのために作られたものではない。正福寺整備以外にも、中世城郭(もしくは近世城郭化する過程か)としても整備された部分であったということも十分に想定できる。

※発掘調査により、近世寺院跡の痕跡が確認され、近世の土地利用については確実につかむことができた。発掘調査エリアでは、近世の改変が大きいと考えられ、中世の痕跡は見つけられていない。

### おわりに

- ・航空測量図化と微地形測量により、笠間城周辺の遺構群について考察ができるようになってきた。
- ・侍屋敷としても利用された笠間城跡北西の遺構は、北西側のコの字型の土壘と堀、西側にのびる尾根を断ち切るような堀切、AからCにかけてみられる曲輪群等はまさしく中世城館の名残といえる。近世侍屋敷への出入り口とは別に通路と虎口がみられるが、それも前代のものと考えられないか。
- ・絵図に山林として描かれている正福寺跡東側の遺構は、ピークの曲輪は内部が区画されて、複数の虎口が見られたこと、堅堀・堀切などの遺構が残存していること、南側に幾重の曲輪を配しており、堅固な備えとなっていることなどから、まさしく中世城館の名残としてとらえることができようか。  
→近世絵図にみられる侍屋敷がこの部分であったとすれば、ここまで遺構を作ることはするのか？
- ・正福寺跡は、近世寺院の痕跡を確実にすこができたことが大きな成果とも言えるが、土地利用の痕跡を見てみると、寺院だけでは必要ないと思われるものがあるので、中世城郭の名残として考えたほうがよいのではないか。

→3か所とも、それぞれが一つの城館として完結できるぐらいの遺構をもっている。

- ・明確な城郭遺構でありながら、「正保城絵図」をはじめとした近世の絵図には取り上げられていないことから、中世で断絶したものと考えられる。
- ただし、近世武家屋敷地において、中世城館を彷彿させるような構造物が使われていたのか。その部分については、他の近世城郭と比較検討を行う必要がある。
- ・あらためて、中世の笠間城は、平地居館から出発し、南北朝期を含む室町時代に軍事的要請から佐白山周辺に城を移しその原型がつくられ、周辺にあった六坊をも含め、戦国期にかけて整備されていったのでは⇒その痕跡が今回の報告で取り扱った遺構群ではなかろうか。

◎国史跡化にむけて重要なのは、①現地にどのような痕跡が残っているのか②それらの来歴はどのような経歴をたどってきたのか③残された痕跡は、考古学的調査によって年代や性格が判明できているか④それらすべてを総合的に踏まえて、笠間城とは地域の歴史を考える上で、どのような歴史的価値が見いだせる遺跡なのか、こうしたものを解明して打ち出すことである。

◎笠間城の国史跡化に向けて、カギとなるのが中世に起源をもつという「中世」部分をどのように証明するのか。顕現している遺構から少なくとも戦国時代にはこうしたものが現地にあった可能性が高い。具体的な年代等については、発掘調査の成果によって判明することを願いたい。

### 主要参考文献

- ・笠間市史編纂委員会『笠間市史 上巻』笠間市 1993年
- ・笠間市教育委員会『笠間城跡保存整備基礎調査報告書』2014年
- ・岡田武志「笠間城跡」(茨城城郭研究会編『図説 茨城の城郭』国書刊行会 2006年)
- ・高橋修「笠間城」(峰岸純夫・齋藤慎一編『関東の名城を歩く 北関東編』吉川弘文館 2011年)
- ・三島正之「笠間城をめぐって—茨城県笠間市の中世城郭(一)ー」(『中世城郭研究』第22号 2008年)
- ・額賀大輔「笠間城」(『かさま歴史ブックレット4 戦国の城を読み解く』笠間市教育委員会 2022年)

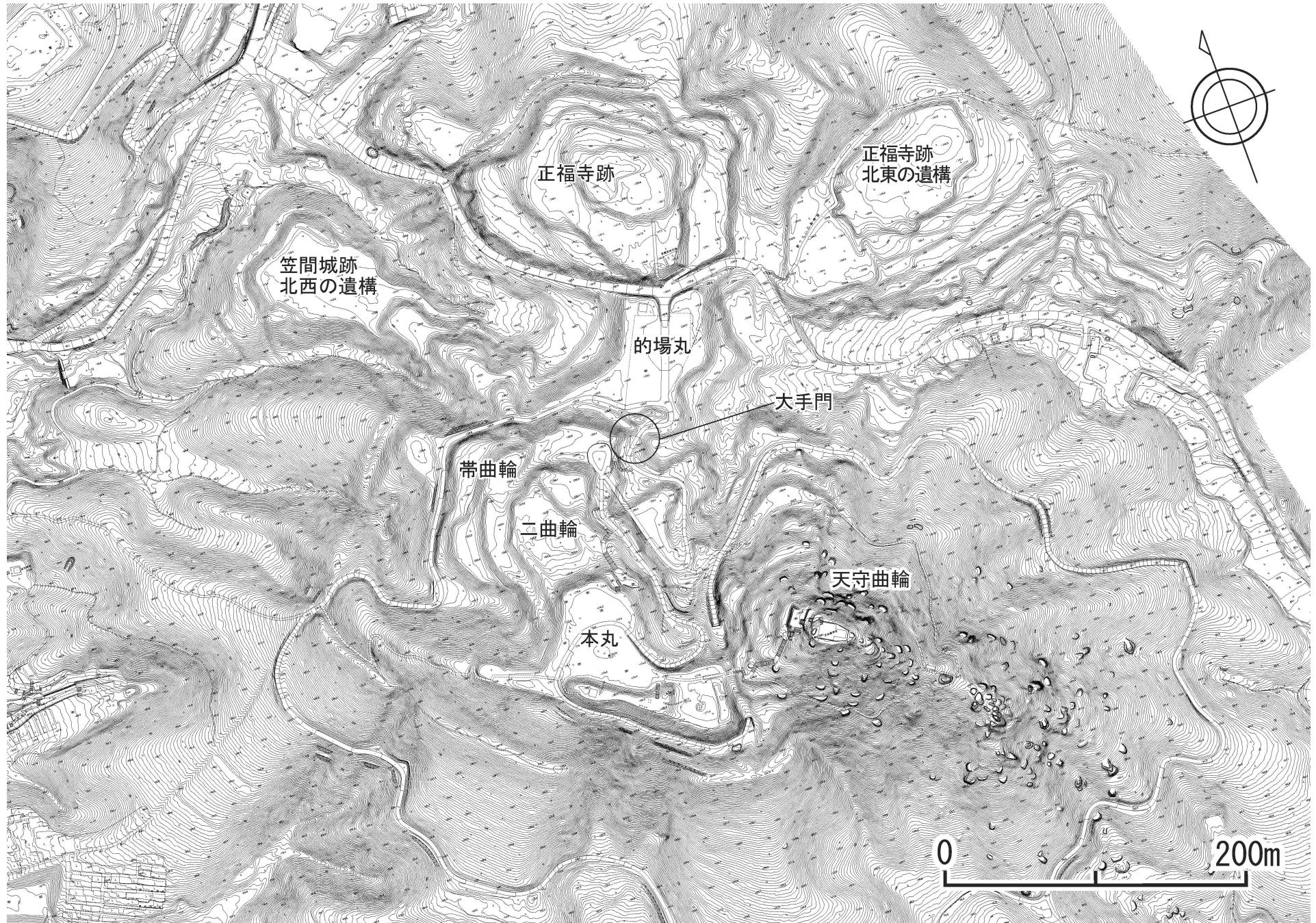


図1 笠間城跡縄張り

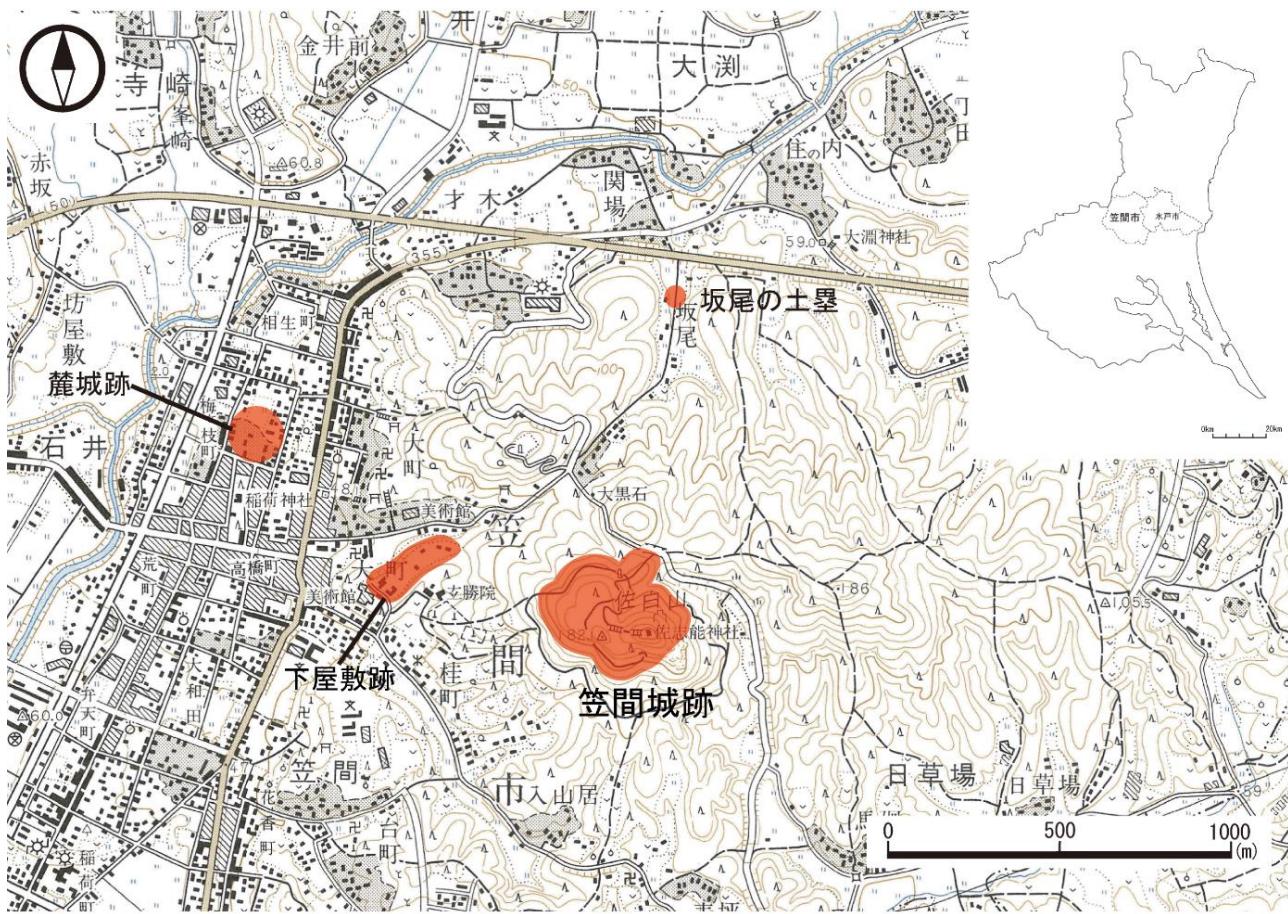


図2 笠間城跡周辺図

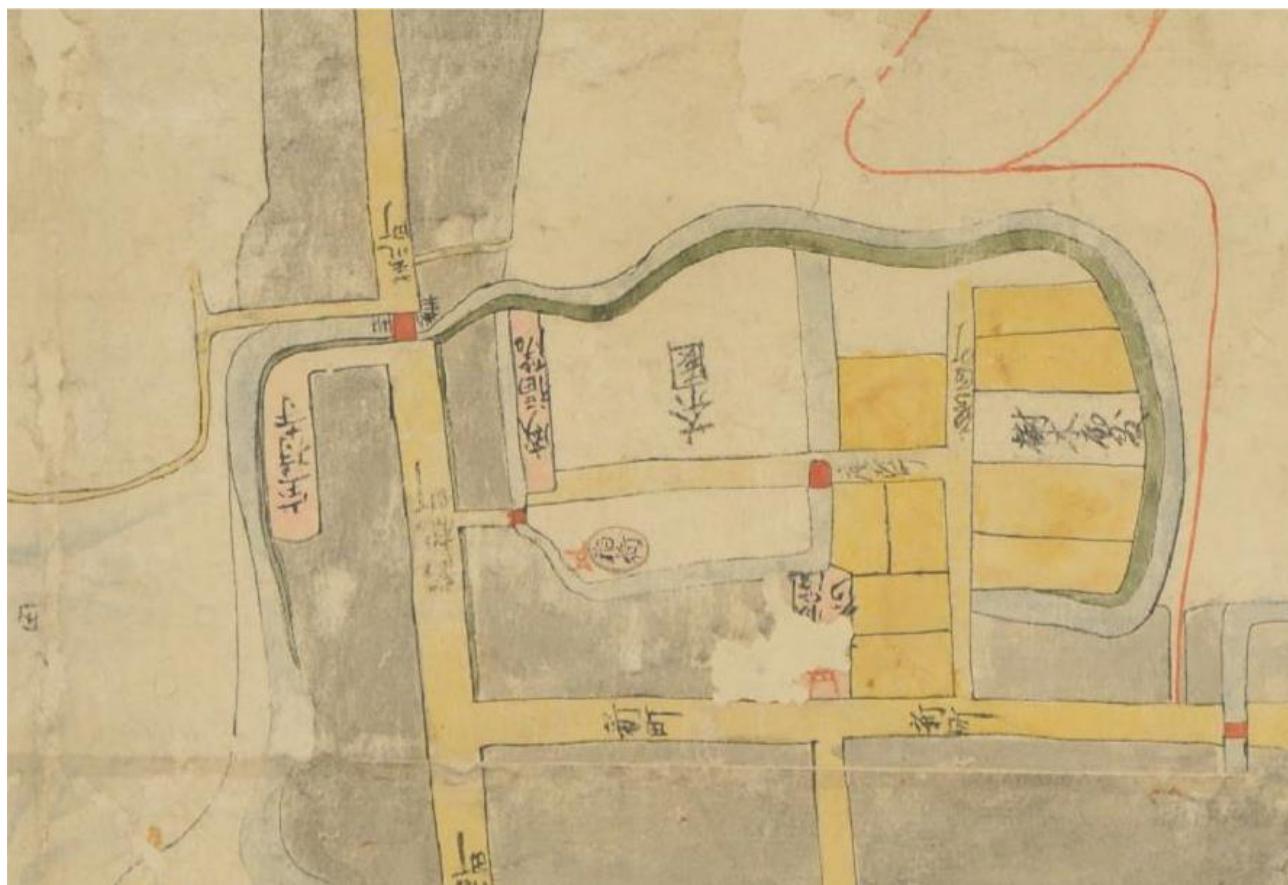


図3 絵図に見える麓城跡(部分「笠間城と城下絵図」笠間市教育委員会蔵)

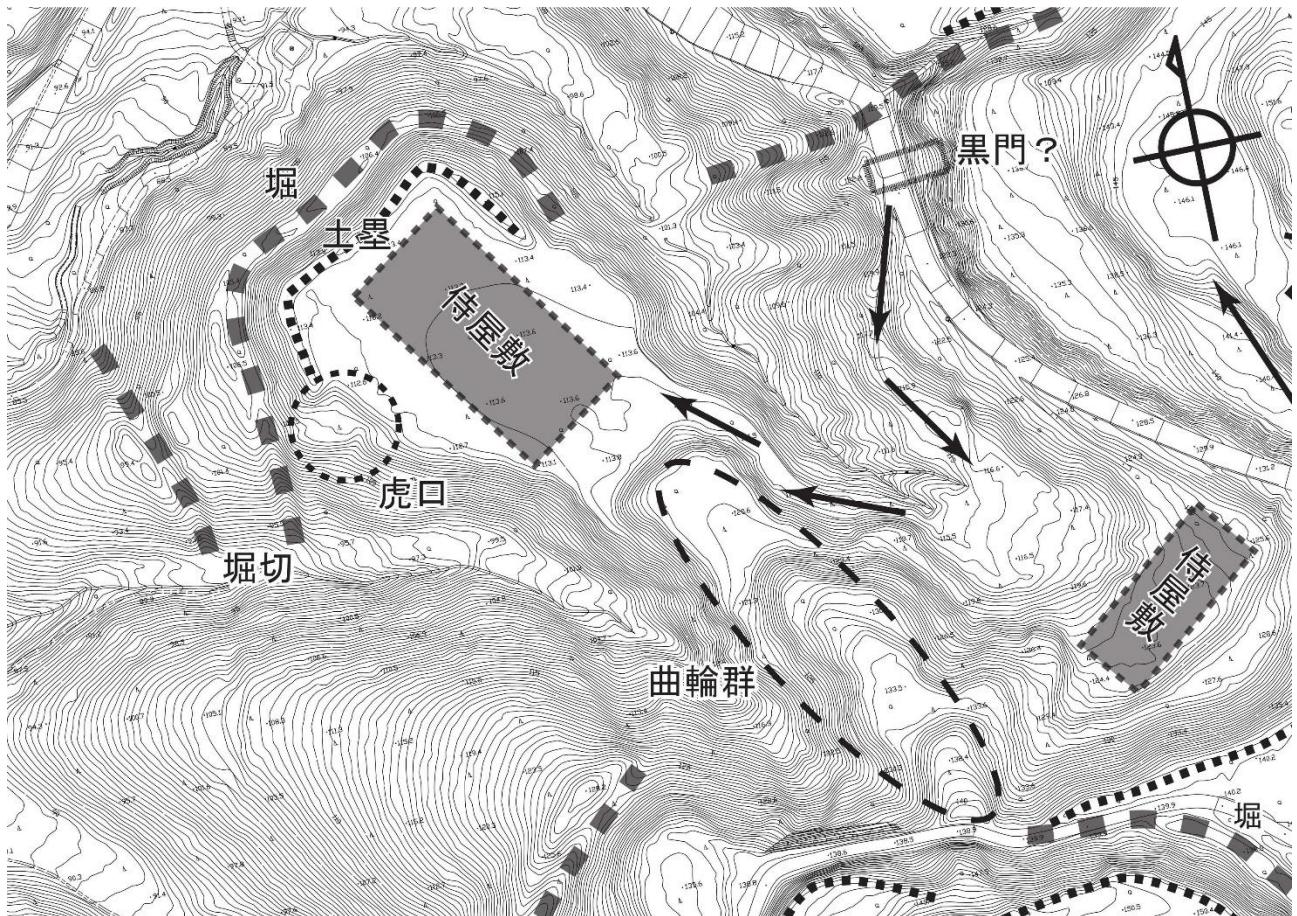


図4 北西の遺構周辺図

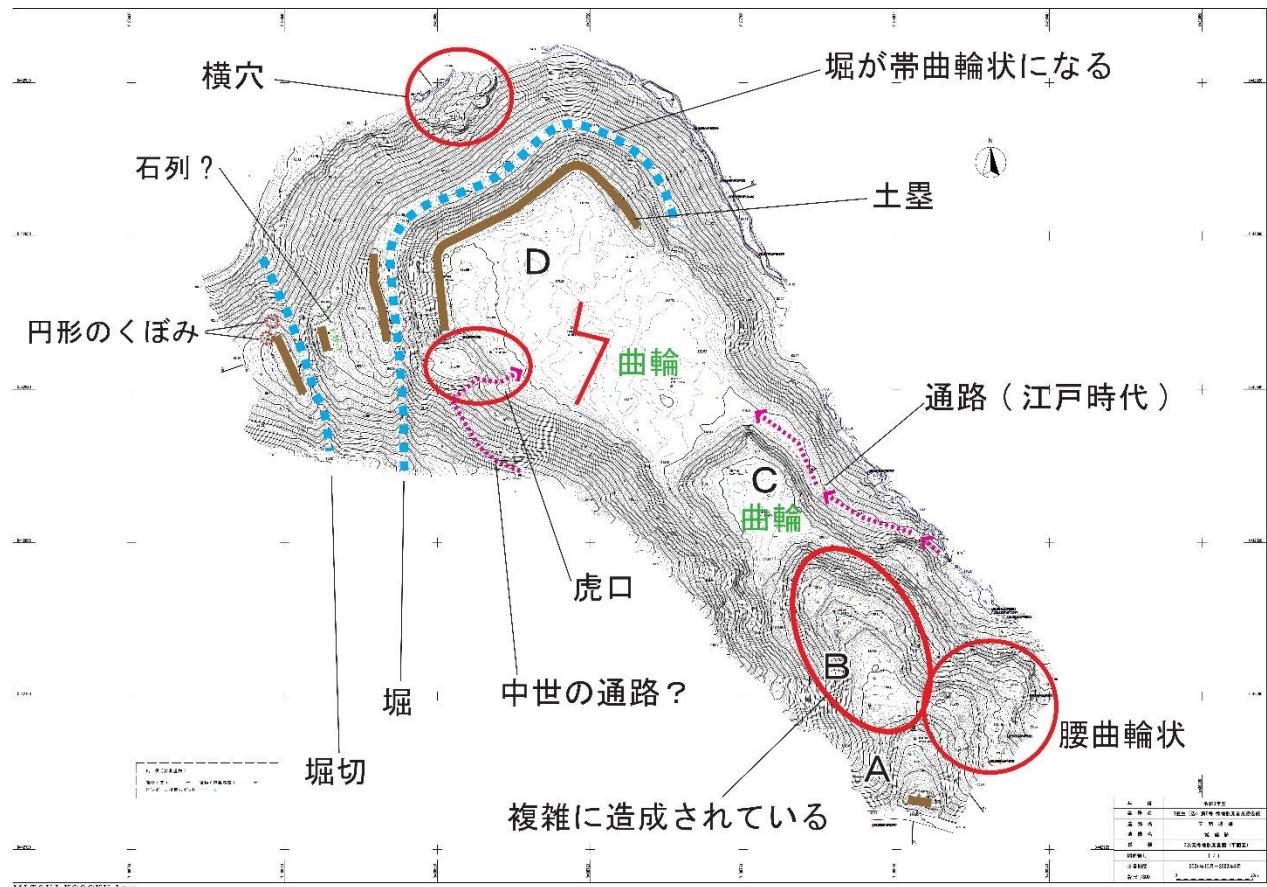


図5 北西の遺構詳細図

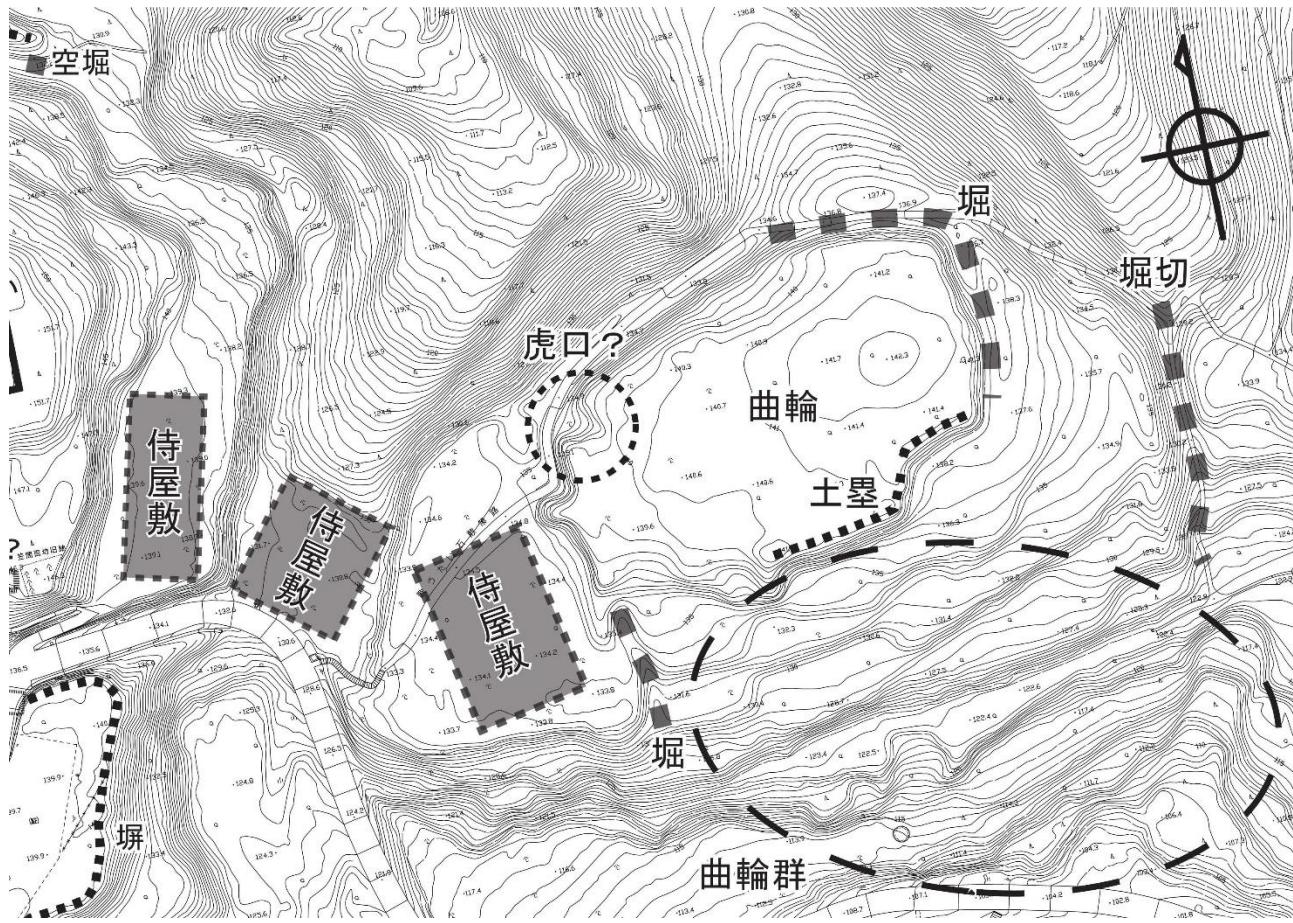


図6 正福寺跡東側の遺構周辺図

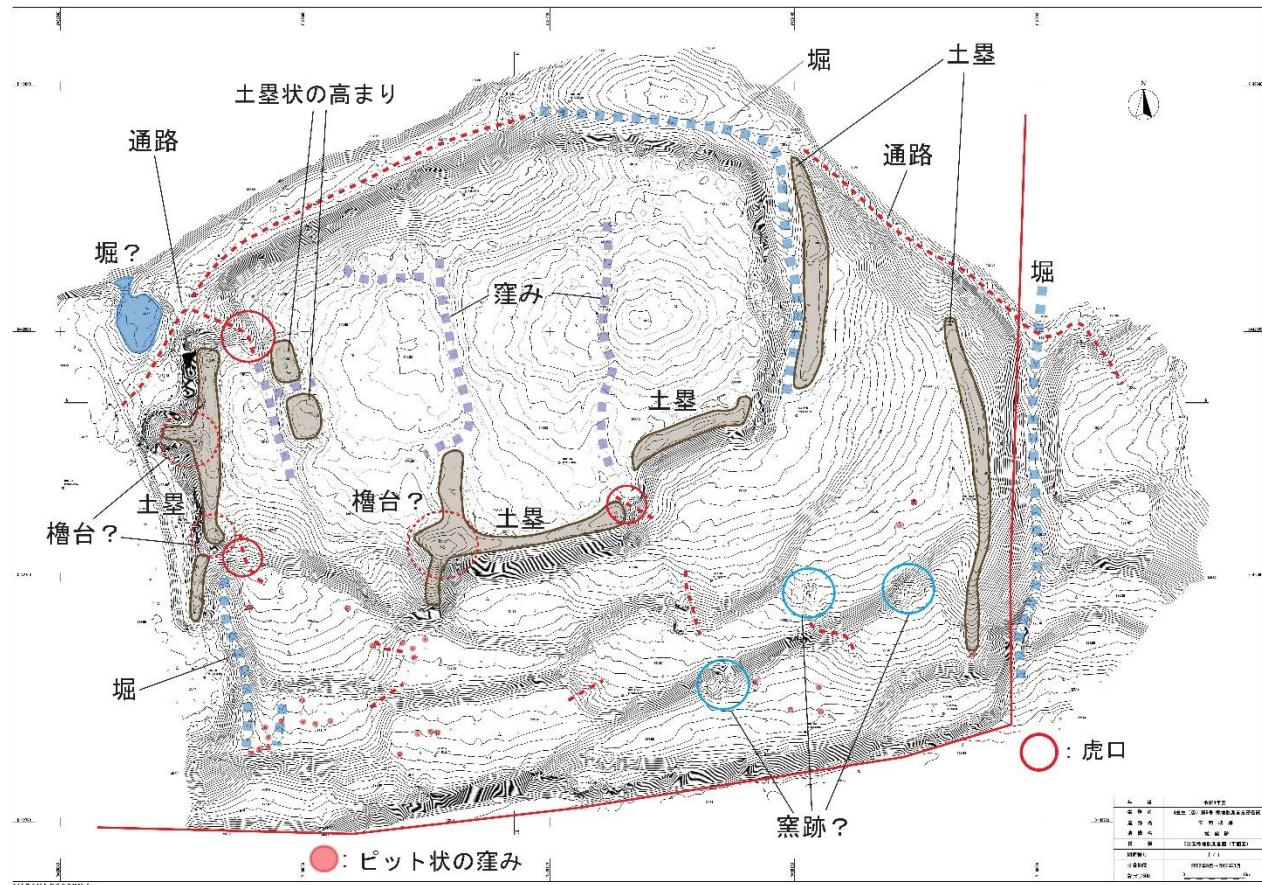


図7 正福寺跡東側の遺構詳細図